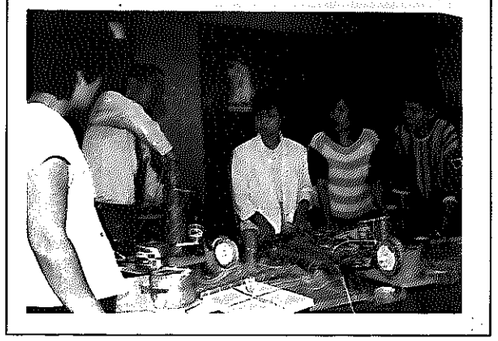
まちの話題

値を高める包み方――講習会

優れた包装は中味の価値を高めます。六月二十七日、中央公民館研修室で開かれた「包装講習会」に、主婦ら十人が参加しました。これは、白根地区公民館が毎年実施しているもので、今年で三回目です。

当日は、新潟市内のデパートから、実際に販売員を指導している教育課長を講師に招き、箱物や瓶の包装、ひもやリボンのかけ方などを実習しました。

「皆さんなかなか筋がいい」と講師。優秀な販売員になれますでしょうか。



火災を発見、消火。二人に感謝状

戸頭地内で発生した火災に、適切な判断と行動で消火に当たった小熊吉男さん（戸頭）と飯山美雪さん（同）に、七月十七日消防事務組合（管理者・滝沢市長）から感謝状が贈られました。

二人は、六月十七日午後十一時ころ近くの倉庫から発生した火災に、火災報知器のベルで気づき、小熊さんは現場へかけつけ備えてあった消火器で消火に当たり、飯山さんは消防署へ通報しました。

発見当時、炎は天井へ届く勢いでしたが、初期消火が功を奏し、被害を最小限度に食い止めることができました。

先生の見た現代っ子

すばらしい子供

習字の練習で、ある児童が床に墨をこぼしました。その子は早速ぞうきんを持ってきて、床の墨をきれいにふき取りました。

その後のことです。清掃の汚水を捨てる水洗い場で、二人の女の子がバケツの中に手を突っ込んで何かを洗っています。見るとバケツの中の水は真っ黒です。床の墨をふき取ったぞうきんを、一生懸命洗っているのでした。

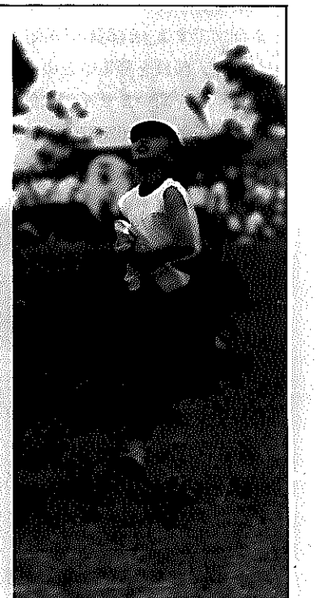
床を汚した。ぞうきんでふく。汚れたぞうきんをきれいに洗う。当然のことですが、問題はその二人の女の子が、床に墨をこぼしてぞうきんを汚した子供ではなく、全然習字練習とは関係のない子供だったということです。

床の墨をふいた子供は、たぶん習字練習が終わったら、ぞうきんを洗うつもりだったのだと思います。しかし、汚れたぞうきんを目ざとく見つけた二人の女の子は、だれに言いつけられたのでも、頼まれたわけでもないのに、黙って洗い始めたのです。

「おれがしたんじゃないもん」「私、関係ないもん」と言い、頼まれても「いやだ」と逃げ、言いつけられるとしぶしぶながらやる子供。自分に直接関係なければ、目の前で見ていてもやろうとしない。そんな子供が多い中で、二人の女の子を見つけたのです。胸がほかっと温かくなるすばらしい子供でした。

「今の子供たちは」と、とかく批判されることが多いのですが、まだまだこんな子供がいることに心強さを感じました。

（新飯田小学校にお願いしました）



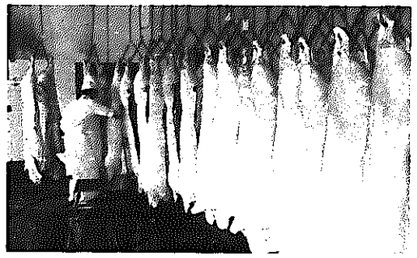
写真と文とは関係ありません

質で勝負。枝肉共進会に豚92頭

豚肉の質のよさを競う「市枝肉共進会」が開かれ、六月十八日、新津枝肉センターで審査が行われました。これは、家畜の改良増殖など畜産を振興するため、市や農協などの農業団体で組織する実行委員会が開いたもので、三十戸の養豚農家から九十二頭の豚が出品されました。受賞者は次のとおり。

【第一部】（年間五百頭以上出荷農家）
最優秀賞＝小島洋朗（西笠巻新田一）
優秀賞＝高橋康夫（同）、藤原昇（同二）　**優良賞**＝渋川大海（下大郷一）、中山正（獺ヶ通）、田村厚（牛崎）

【第二部】（年間五百頭未満出荷農家）
最優秀賞＝阿部久嗣朗（西笠巻新田一）
優秀賞＝小林勝（堀掛）、小林嘉之（浦梨）　**優良賞**＝渡辺省三（小蔵子）、近藤義雄（中山）、安達安夫（牛崎）



出荷された豚は、枝肉センターでと殺、解体され極上、上、中、並などに格付されます。今回の共進会では、これに準じて審査を行いました。

表彰おめでとうございます

二階堂教育長が文部大臣から

二階堂教育長

昭和六十一年度地方教育行政功労者として、市教育長の二階堂正吉さん（新潟市・七十二歳）が、文部大臣から表彰されました。

二階堂さんは、昭和四十六年からこれまで教育長として在職し、現在五期目を務められています。

後藤さんが県人権擁護委員連合会長から

人権擁護委員として長年、人権思想の普及と高揚に貢献され、その功績が特に優れていたことから、後藤芳さん（菱潟新田・六十九歳）が、県人権擁護委員連合会長から表彰されました。

思いやる心

地域社会とボランティア

今、「思いやる心を育てる教育」実践校が、全国に二千八百校ほどあります。それは「社会福祉協力校」の指定を受けた小・中・高校のことです。

この社会福祉協力校は昭和二十五年、神奈川県で最初に試みられたものですが、昭和五十二年、全国普及に力が入れられ、現在では北海道から沖縄まですべての県で取り組まれています。いちばん数の多い県は長野県で、三百校を超えています。

試行錯誤で出来た布製サッカーボール

社会福祉協力校の一つ、神奈川県のある県立高校でこんなエピソードがあります。

この高校と近くの養護学校とは姉妹校関係にあり、両校の生徒は何かにつけて親しく往来している仲です。

ある日の体育の時間、両校の交流授業でサッカー競技を行った時のことです。高校生たちは、体の不自由な生徒たちが、痛そうにボールを蹴っているのを見ました。蹴っても痛くないボールを何とか製作できないものかと考えた末、布製のサッカーボールを作ることを思いつきました。

痛くないサッカーボール

まず型紙を作ることにしました。サッカーボールは、六角形と五角形の組み合わせで出来ています。六角形は簡単に製図することができましたが、五角形はなかなかうまくいきません。早速、数学の先生を訪ねて、教えてもらうことにしました。

数学の先生は、ふだん数学の得意でない生徒たちがそろってやって来たので驚き、真剣に学ぼうとする姿に目を見張るのでした。思いやる心が動機となって、サッカーボールを作った高校生たちはその後、嫌いな数学にも関心を持つようになったということです。

知恵を出し合い他人の幸せをつくる

学問は自分のためにするのではなく、他人の幸せのためにするものだと自覚した時、それは知識から知恵の働きへと向かっていきます。ほんとうの文化がつくられるのは、そのような知恵の働きに支えられたときです。この高校生たちのエピソードは、このことをよく示した例と言えそうです。

淑徳短期大学教授。前全国ボランティア活動振興センター所長
木谷宜弘